



戦争報道番組を素材とした人権学習の歩み：  
基礎演習の一年を振り返って

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土井, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00003429">https://doi.org/10.24729/00003429</a>

## 《研究ノート》

# 戦争報道番組を素材とした人権学習の歩み

— 基礎演習の一年を振り返って —

土 井 洋 一

### 1. 基礎演習の位置づけと課題

近年の全国的な動静の中で、大阪府立大学においても、教養部改革と連動した全学的なカリキュラム改革が実施されて2年が経とうとしている。その過程で、私たちの学部における演習の位置づけも大きく変わった。

それまでは、教員をあえて「基礎系」と「分野系」に二分し、前者を2回生対象の、後者を3回生対象の、全員を卒業論文指導を含む4回生対象の各演習担当としてきた。しかし、そうした古い二分法は有名無実化し、およそ実態にそぐわなくなっていた。論議を重ねた結果、演習体制は大きく改変されることになった。その改変の第一は、全員が3、4回生対象の専門演習（原則として連続、つまり持ち上がり）を担当すること。第二は、若手を中心とする約半数の教員が、2回生対象の基礎演習と外書講読演習のどちらかを担当すること。第三は、第2学年後期の学生に重要な決断を迫る専門演習体制を緩和するため、選択でもう一つの専門演習を履修可能にしたこと（専門演習は、月曜日、水曜日の午後に約半数づつ配置されている）。

こうして生まれた基礎演習がたとえ妥協の産物であったにせよ、担当教員は重要な課題を背負うことになった。基礎演習を担当する教員は、少数づつ入れ替わりながら何を共通課題にすえ、どのような方法で課題を達成したらよいか。手探りの実験が開始された。昨年度は7名、今年度は8名の教員が各自の意見を出し合い、少しずつ共通の課題を明確にしてきた。以下の「オリエンテーション要項」は、その過渡的な集約である。1.の6

項目を束ねる「獲得目標」は、次年度用に初めて明記されたもので、これまでは、単に「学習の過程で獲得目標にして欲しいことは、以下のとおりである」とのみ記されていた。

テキスト、サブテキストはあくまでも例示であるが、年度ごとに少しずつ入れ替えてある。この基礎演習が、私たちの学部の専門教育カリキュラムに明確な位置を占めるためには、もう少し年数を要するであろう。「演習Ⅰ案内」が示すように、現在はまだ試行錯誤の段階である。それぞれの演習内容を公開し、自由で活発な論議を積み重ねていく必要があろう。

私がかねがね、低学年の教科とりわけ演習でどのような学習・教育を展開できるか、その成否は、高学年の学習・教育のあり方を左右すると考えてきた。昨今の学生の実態をつぶさに観察すれば、恐らく全国の大多数の教員も同じ思いであろう。さて、基礎演習とはいえ、専門教育カリキュラムの一環なのだから、いわゆる教養演習ではなく専門の基礎演習でなくてはならないのは当然である。ただし、その「基礎」の範囲をかなり幅広くとらえ、「社会福祉入門」演習とは異なる特色を与えたい、というのが私たちの考えである。その代わり、担当教員は専門基礎演習向けと専門演習向け、という二つの顔を使い分けざるを得なくなった。この難題をどうやって突破するか、これからが勝負である。

困惑しているのは教員側だけではない。学生たちにもまた、戸惑いがある。基礎演習の全般的・基本的な性格、専門演習とは連結しない（基礎演習と同じ教員の専門演習を選ぶのは好ましくない）ことをオリエンテーションで伝えられ、学生たちの頭は混乱し表情は複雑になる。さざ波を立てながら基礎演習は2年目に入り、もうすぐ3年目に入ろうとしている。

## 社会福祉演習Ⅰ

(オリエンテーション要項)

### 1. 学習過程での獲得目標を論理的思考能力と共同学習能力におく。

- 1) 社会科学的視点、方法（テーマが社会分析を含むもの）の学び方
- 2) 文献講読の力量
- 3) 統計を読み取る力量
- 4) 資料・文献の検索技術
- 5) レポートの作成・報告技術
- 6) 討論できる技術

### 2. 標準的なテキスト例

- 1) 金子郁容『ボランティア もうひとつの情報社会』岩波新書 1992
- 2) 山井和則『体験ルポ 日本の高齢者福祉』岩波新書 1994
- 3) 山井和則『体験ルポ 世界の高齢者福祉』岩波新書 1994
- 4) 菅原真理子『新・家族の時代』中公新書 1987
- 5) 暉峻淑子『豊かさとはなにか』岩波新書 1989
- 6) 宇沢弘文『地球温暖化を考える』岩波新書 1995
- 7) 藤岡純一編『スウェーデンの生活者社会』青木書店 1993
- 8) 野村一夫『社会学の作法・初級編』文化書房博文社 1995

### 3. サブテキスト例

- 1) 外山滋比古『知的創造のヒント』講談社現代新書 1977
- 2) 船曳建夫他『知の技法・第三部』東京大学出版会 1993
- 3) 斉藤 孝他『文献を探するための本』日本エディタースクール出版部 1989
- 4) 石川真澄『短い文章のコツ』KKベストセラーズ 1982
- 5) 杉原四郎他『研究レポートのすすめ』有斐閣新書 1986
- 6) 現代新書編集部編『新聞をどう読むか』講談社現代新書 1986
- 7) 佐高 信『現代を読む 100冊のノンフィクション』岩波新書 1992

## 演習 I 案内

1995.12.4 オリエンテーション資料

### 教員 A

テキスト： 共通テキスト他の中から、ゼミメンバーと相談して決める。

サブテキスト： 例示文献の他にも、適宜紹介して使用する。

演習内容： 前期は、サブテキストを使って文献・資料の集め方と扱い方、まとめ方の学習をフィールドワークを介して深める。後期は、テキスト・統計資料・新聞記事を使いながらレポート報告・質疑討論を深めていきたい。

### 教員 B

テキスト： 共通テキストの中から数冊を選択して使用する。サブテキスト数冊も、加える予定である。

演習内容： 前半は、テキストを使ったグループ討論を行う。サブグループに分かれて討論を闘わせる。後半は、夏季休暇中に取り組む予定の自主研究を中心に発表、質疑応答、討論する。また、資料探し、情報収集のフィールドワークも行う予定である。

### 教員 C

テキスト： 共通テキストの中から、ゼミメンバーと相談して決める。

演習内容： このゼミを通じて、グループの中で自分の考えを述べ、他人の意見を聞いて討議し、ディスカッションを通じて思考を発展させていく方法を学んでほしい。前期は、選択したテキストを通じて討論する。夏期に自主研究を実施し、後期は、自主研究のレポートや、それと関連して検索した論文を読みあわせながら、討論を発展させたい。

### 教員 D

テキスト：藤岡純一編著『スウェーデンの生活者社会 — 地方自治と生活の権利 —』青木書店 1993

サブテキスト：岡沢憲芙『おんたちのスウェーデン — 機会均等社会の横顔 —』日本放送出版協会

ヤンソン由美子『男が変わる — スウェーデン男女平等の現実 —』有斐閣

訓覇法子『スウェーデン人はいま幸せか』日本放送出版協会

演習内容：前半は「生活大国スウェーデンから何を学ぶか」をテーマにして、レポート報告・質疑・討論を深める。後半は、夏期休暇中の自主研究を中心に発表・討論をする。

### 教員 E

テキスト：共通テキストの中から、ゼミメンバーと相談して決める。

演習内容：前期は、テキスト中心に報告・グループ討論を行う。後期は、文献・資料の探索のみならず、大阪市街各地のフィールドワークを通じて体験学習の機会を取り入れる。

### 教員 F

テキスト：共通テキストの中から、ゼミメンバーと相談して決める。

演習内容：一つの問題を主観的にとらえる日常の我々の習慣から、その問題の周辺に存在する問題も含め、情報を集めながら多角的に客観的分析ができるような研究活動の基礎的な視点の習得をめざす。具体的には、社会問題を理解するために必要な情報探索方法、問題の分析および考察の方法について、それらの実践能力を身につけることを中心に進める。

**教員 G**

テキスト：共通テキストの中から、ゼミメンバーと相談して決める。

演習内容：何故ある社会現象、社会問題が生じているのか、解決する手だては何か。そうした疑問、問題意識をもっている者が少なくはないだろう。もちろん、大学1、2年の段階では、すっかりした「問題意識」という形をとっていない方が普通だろう。ちなみに、私自身は「何故、僕たちは素直に手をつなげないのか。おそらく社会的な背景があるに違いない」というものだった。このゼミでは、そうしたナイーブなこだわりを社会科学として形にするトレーニングを目指したい。

**教員 H (新任予定者)**

テキスト、演習内容は、開講時に決める。

## 2. 戦争報道番組を取り上げる契機

昨年度は、金子郁容著『ボランティア もうひとつの情報社会』を主たるテキストにして行なったが、学生（男子2名、女子8名）たちの関心を喚起し、論議を盛り上げることに見事失敗した。私とも自由闊達に語り合えた中国の留学生（29歳）を除くと、質問しなければなかなか自分の意見を言わない学生ばかりで、私は「お通夜ゼミだな」とつぶやき、自嘲した。もっともこの初年度は、出席番号順に学生を割り振るという不手際があり、入り口の時点で学生の不信を買ったため、どの教員の演習もあまり振るわなかったようだ。そこで今年度からは、専門演習同様、学生の希望で所属を決定することにした。

一年目の失敗にはこりたものの、二年目を向かえても私にはさして名案は浮かばなかった。だが、やらなければならない。そこで今回は、評判の高い暉峻淑子著『豊かさとはなにか』を、最初のテキストに指定した。文献・資料探索の方法（フィールドワークを含む）を一通り学ばせた後で、6月中旬に第一回目の報告・討論に入った。なんとなく、所属学生（男子3名、女子6名）たちの雰囲気は昨年とは違う。集団に堅苦しさがなく、よく意見を言い合うしよく笑う。最初の二つの章を分担したNさんの報告レジュメには幾つかの要点と疑問が記されていたが、私がゼミ学習を横道に誘い出す最初の契機は、「二 西ドイツから日本を見る」の中の「抗体としての強い『個』」（19頁）の意味を探る話し合いの中にあった。

著者は、ミヒャエル・エンデの文章、「ドイツ人の場合、現在の文化的状況は自らが引き起こした悲劇であると考えています。……工業化社会が、このように容赦のない破壊的な結末に至ったのも、自らがその原因を作った。最近になって思うことは、ヨーロッパ人の体の中には抗体がある。すなわち、工業化の結末として、自身に対して生み出してしまった毒を制する力もまた自身の中に持っている。国家というものに対するロイヤリティはそんなに強くありません。日本人はそれが強い。互いにおしなべていっしょに、という方向づけと、工業化社会の原理とは、はたしてひとつの共



同体の中に同居しうるものなのか。そこのところには日本社会のあやうさをかんじます。」を、前段で引用していた。

その毒を制しコントロールするものが、抗体としての強い「個」と社会的制度、すなわち、環境保護や教育や社会保障制度や政治制度や労働のありかただ、というのが著者の見解である。そして、「日本と同じように敗戦のガレキの中からたちあがって再建された西ドイツの社会を見ると、日本とはちがったもうひとつの繁栄のしかたがある、と思わないわけにはいかなかった」(21頁)という結論に触れた時、私はある報道番組を思い起こした。それは、「日独の戦後補償47年 徹底比較」という90分のドキュメンタリー番組(1992.8.8 フジテレビ)のことである。この素材は本書の全体構成と直接の関係はないが、今大戦の二つの敗戦国が異なる繁栄のしかたをしたとすれば、「戦後補償のありかた」という観点からその疑問を解くことができるかもしれない。私はそう考えたので、さっそく収録ビデオを観せて感想文を書いてもらことにした。

この番組の主題は「戦争の加害者性」にある。まず中国人・ユダヤ人の大量虐殺など、両国の侵略・加害の実写映像が克明に流れ、続いて、①賠償・補償の実情、②戦後の政治状況、③戦争犯罪の裁かれ方、④負の遺産の保存状況、⑤政治家の対処のし方と戦争観、⑥企業の加害責任のとり方、⑦歴史教育のあり方、について両国間の比較がなされる。途中と最後に、1985年5月8日の終戦記念日に、西ドイツ連邦議会においてなされたヴァイツェッカー大統領の演説の一部が組み込まれている。

### 3. 夏休みの課題レポートへ

学生たちのレポートは、おおむねこの番組の主張に肯定的であった。というよりも、知らない事実を次々と知らされ、緊張感のある文章が多かった。とくに、比較のポイント①、②、⑤、⑦への言及が多く、当然のことながらドイツのいきかたとの対比で、日本の現実を批判的にとらえ直そうとする姿勢が目立った。この番組を最初に観たことが、その後の彼らのレポー

ト内容に大きな影響を与えたように思われる。

加害者としての意識を色濃く残しているドイツ社会は「新鮮であり、驚きでもあった。それだけ日本では戦争への意識が薄れているのだろう。沖縄や、広島、長崎での原爆の例をあげるまでもなく、日本でも被害者の意識は今なお残っている。(中略)しかし、ビデオを見ていく中で、日本という国がなんとも不思議な国に見えてきた。僕自身そうでもあるのだが、被害者の意識が強すぎるのではないだろうか。戦争というものを知れば知るほど、僕たちの国がしてきたことを知れば知るほど、その行為の醜さに目をそむけたいくなるようなものが多くでてくる。それを僕たちは、どれだけ知っているのであろう。そして、僕たちの国はその行為に対してどれだけだけの責任をとってきたのであろうか。ビデオを見る限り、誠意を感じることはなかった。確かに、ドイツにはドイツの歴史が、日本には日本の歴史がある。地理的な違いも大きい。一様に比較することは難しい。しかし、過去の過ちを直視しようとしているドイツの姿勢は評価できると思う。彼らにとっては平和な未来への第一歩が過去への償いだった。戦争犯罪者への追求も怠っていない。そうすることによって彼らは現在を見、未来を築きあげようとしている」(A君)。

これは、他の学生の感想をも代弁した標準的な文章である。レポートの中には、最初に「どうしてはじめてからこのような相違が起こったのだろうか」という問いを設定し、以下で詳細な考察を加え、最後に自分なりの結論に導くといった優れた構成のもの、億と兆の単位をはじめ数値に鈍感なもの、せっかく真剣に考察したのに最後で「私たちは○○○しなければいけない」調のきれいごとで終わるもの、などもあった。他に、「口先だけの」こうした取り組み(番組だけではなく、私の進め方への批判が含まれていたかもしれない)への嫌悪感を顕にしたY君のレポートがあったので、誤解を解いてもらうための助言をした。彼は、やがて夏の課題レポートを話し合う過程で、秋以降、重要な役割を果たすことになる。

全員のレポートには、途中や最後の余白に赤字で私の感想を書いて返却したが、総じて次の3点を守って欲しいと思った。第一は、素材はドラマ

ではないので、データを含む事実と事実関係を正確に認識すること。第二は、「何故か」の問いを発見して考察を深めること。第三は、歯の浮くようなきれいごとで総括してしまわないこと。一点目は、以後かなり改まった。全員がメモをとりながら素材と向き合うようになったからである。二点目は、以後も個人差が出た。だがこれは、ある程度許容してやらねばなるまい。三点目は、ずいぶん改まったが、学生がついつい逃げ込んでしまいたくなる安息の場のようなのだ。

学生たちの反応はそれぞれに興味深く、私の押さえがたい衝動を刺激した。もうすぐ夏休みに入る。このままテキストに戻ってもよいが、それではかえって中途半端になる。そういえば、今年は戦後50年目にあたる。大震災とオウム騒動の影に隠れてはいるが、今夏には多くの戦争報道番組が放映されるに違いない。逡巡しながら、Ynさんのレポートにあった「父や祖父母が戦時中どのような生活をしていたのかを知りたい」という一節に触発され（後述の「演習Iレポートの概評(3)」参照）、夏休みの課題レポート「私の家族の戦争体験」をひねり出した。夏休み直前の時間には、その呼び水として「壊滅した商都～大阪大空襲～」(映像資料『戦後日本の原風景』VOL.2 米国公文書館 47分)を観せた。

7月中旬から8月初旬、私は大学病院の耳鼻咽喉科に緊急入院した。退院直後、担当医の許可が得られたので、前から念願していた広島を旅することができた。真夏の広島市街を、妻と二人であちこち歩きまわった。歩きながら、いろいろと考えさせられることがあった。今夏には、予想にたがわず多くの戦争報道番組が組まれていた。その幾つかを観、ビデオに収録しながら、私は学生に学んで欲しいことを次の三つの対話で包摂したいと考えるようになった。① 戦争と平和、② 貧しさと豊かさ、③ 差別と人権、この三種の思考回路をつないでみると、私の基礎演習の輪郭が描けそうな気がしてきた。

## 4. 戦争学習の展開

### 1) 教材としての沖縄戦

後期最初の時間に、6名の課題レポートが提出された。祖父母の居住地が遠距離、アルバイトで帰省できなかった、フィリピン戦線から生還した祖父に拒絶された、等の理由で3名が提出しなかった。このうち、祖父に語ることを拒否されたA君は、その後編成される素材を通して、一層自分が知らない祖父の戦争体験へのこだわりというか、わだかまわりのような心情を抱くようになるが、人にはどうしても語りたくないことがある。それをどうしても聞きたいなら、待つより他はない。他の理由はともかく、私は彼のような理由を想定してはいなかったが、大いにあり得ることなので快く承した。

提出されたレポートは、それぞれに充実していて私の関心をそそった。だから、「演習I レポートの概評(1)」にその寸評を書いた。私自身、沖縄調査(11月1日～5日)を控え、多忙の日々を過ごしていた頃である。手抜き感が無いではないが、今の時点で加筆修正しないほうがよいと判断したので、そのまま掲載する。

沖縄戦を取り上げたY君のレポートを深めるために、関連する映像資料を続けて2本取り上げることにした。一つは、「沖縄23万人の礎」(1995.6.23 NHKスペシャル 75分)、もう一つは、「オキナワの軌跡～33万島民の悲劇の記録～」(『戦後日本の原風景』VOL.10 85分)である。50分前後の長さだと、直後に話し合うことができるのだが、この長さでは観るだけで終わってしまう。レポートを書いて翌週に提出ということになる。前者を10月16日に観て、提出レポートをもとに10月30日に話し合いをもった(先の「概評(1)」は、その時のための私の整理メモでもある)。

6月23日は、日本軍の組織的抵抗が終結した日であり、沖縄県民にとっては忘れがたい日にあたる。沖縄県では、4年の歳月をかけて綿密な調査を行い、日米両軍の戦死者、沖縄県民、朝鮮人の犠牲者、約23万人の氏名を刻んだ「平和の礎」をこの日、摩文仁の丘に完成させた。沖縄戦は住民を

巻き込んだ激しい戦闘だったから、戦争の加害者性と被害者性が複雑に絡み合っている。Y君も、レポートで詳細に述べているように、沖縄と本土との交渉の歴史も複雑である。日本軍が沖縄県民をどのように扱ったのか、そこにどのように凄惨な事実があったのかを次々と知ることにより、さらに沖縄の歴史を学ぶことによって、学生たちは沖縄の人々が日本本土を「ヤマト」と呼ぶ本当の理由を理解したようだ。実際に彼らは、それぞれ沖縄関連の文献にあたってレポートを書いていた。もっとも、話し合うテーマが重すぎて、各自がレポートに書いたことすら言えない雰囲気は漂い、議論にまで発展しなかった。沖縄戦全体のイメージが今一つわかかなかったせいもある（後者のビデオは11月中旬に観た）。

今の若者にとって、沖縄は「一度は行ってみたい」観光の島であり、珊瑚礁のリゾート地である。ゼミ生たちが将来沖縄の地を訪れた時のことを思って、どうしろこうしろと言うつもりはないが、これまでとは違った見方、感じ方をしてくれそうな気がする。

## 2) 身近な戦争報道番組を追って

沖縄戦に焦点をあてた映像資料は、他にも沢山ある。しかし、さすがに学生たちも疲れてきた。重苦しい雰囲気ですべて以上考えさせても、頭が回転しなくなっている。この辺で方向を変えてみよう。学生にとって身近ないくつかの素材の中から、私は「初めて戦争を知った 若者たちの旅」(1995.8.3/8.4 NHK 各40分)を選ぶことにした。この2日連続の番組で、OLと女子学生がそれぞれ、瀬戸内海の久野島にあった軍の毒ガス工場と中国大陸で名をはせた731部隊のその後をたどっている。731部隊のことは学生たちも知っていたが、久野島の件は私も知らなかった。この映像資料は、日本の加害者責任を現在にとどめようとするという意味で、学生たちが最初の映像以来引きずってきた「こだわり」に見事に応えてくれるはずだ。

埼玉県在住の若い女性がこの島に赴いたのは、かつて祖母が女学生時代にこの島に勤労働員され、今も後遺症で広島病院に入院中だからである。当時、この島で働かされた人々の心と身体の傷跡が、一つまた一つ明らかにされていく。オウム事件とだぶらせて胸中を語った元女学生の方もいた。

731部隊の元隊員たちから、すさまじい証言を聞き出した早大生の旅は、高知在住の元隊員の誠実な生き方に支えられている。

私はこの録画を10月23日に観せたが、レポート提出は求めなかった。学生の反応はどこかで確かめておきたかったが、翌週は、前述したように沖縄戦の話し合いを予定していたからである。ところが、6名が翌週にレポートを書いてきた。みずみずしい文章ばかりである。指示されてもいないのに莫大な労力を使って書くという行為は、昨今の学生では珍しい。「条件反射ではないか」などと考えるのは失礼というものである。いずれにせよ、これでは30日当日に、頭を切り替えられなかったとしても当然である。今にして思えば、私の稚拙でせっかちな進め方を批判しつつ、学生たちはじっと耐えたに違いない。

12月前半の2週は、私の入院・手術のために休講となった。追いまくられてきた彼らにとって、この2週間は格好の休息期間となったであろう。入院の直前に私が執拗にも観せた6本目の録画に、学生たちは冷静に答えてくれた。その彼らとの格闘の記録を残しながら、もうすぐ私の基礎演習も終わる。せめてテキストの1冊だけは読破させようと、今は必死である。「忙しいだけで一貫しないゼミだったなぁ、ああ疲れた」という彼らの声が、どこからか聞こえてくる。

## 演習 I レポートの概評 (1)

1995. 10. 30 土井

### 1. 夏休みの課題について

- 1) この課題レポートを読み、私はテキストからしばらく横道にそれてみたいと思うようになった。もし皆さんが、それぞれに家族・親族や重大事件を取材して心のこもった文章を綴ってこなかったなら、恐らく私はそうは思わなかっただろう。私自身は、この戦争を身近に受けとめてこだわりながら生きてきたが、ゼミの素材に取り上げたことはない。もっとも、現在の基礎ゼミのような時間はなかったから、取り上げようがなかったともいえる。
- 2) 祖父母・両親の中国大陆での生活体験を、丹念にそして暖かく描いたNさん。語る祖父の傍らであいずちをうち、合いの手を入れる祖母。そうした場面場面が、まるでコマ送りの映像を見るように生き生きと読み手に伝わってくる。Ynさんは、女学生だった母の叔母から、戦時下の人々の暮らしぶりをこと細かに聞きとっている。服装、配給食料、灯火管制等の事実データが正確に書き綴られている。神戸の飛行機工場から終戦の年に二等兵（補充兵でしょうか）として満州に送られた祖父と向き合ったのは、Tさん。兵隊と軍人の違い、生と死の境、戦後の苦労を聞きとった彼女は、祖父と自分の世代感覚のずれを指摘しながらも、祖父の生き方を非難したりせず、もっと深い次元で「戦争体験」を受けとめようとする。N君の成育環境は、両親の故郷広島、予科練出身の父といった属性からか異色である。そうした利点を生かし、より具体的な事実の発掘と深い洞察に期待する。Mさんは何故、浮島丸事件に照準を合わせたのか。その理由を聞き漏らしたが、こういうユニークな素材とどこでどうして出会ったのかを、後で教えて欲しい。レポートの内容それ自体よりも、実はその方がはるかに重要だからである。Y君は、祖父の弟の沖縄戦体験を通して、実は沖縄戦そのものを超えた「沖縄の心」の内側を、解き明かしてくれた。それは、

私達の中では彼にしか言えないことである（未提出者もいたが、それぞれに理由があるので了解した）。

## 2. Y君のレポートと「沖縄23万人の礎」を素材に考えること

- 1) 司馬遼太郎の『街道をゆく 6・沖縄・先島への道』を読んでいたら、こんな文章に出会った。「この戦いでは住民のほとんどが家をうしない、約15万人の県民が死んだ。沖縄について物を考えるとき、つねにこのことに至ると、自分が生きていることが罪であるような物憂さが襲ってきて、頭のなかが白っぽくなってしまい、つねにそうだが、今もどうにもならない」。この作家の、同時代を生きた世代感覚もあるから、本土の人間が一樣にそう感じているわけではないだろうが、沖縄県民に対するある種のうしろめたさは、私にもある。皆さんはどうだろうか。
- 2) この課題には、全員が応えてくれた。うち4名のレポート末尾には、それぞれ別々の参考文献が1点または数点、記してあった。私は、ゼミレポートに限らずいかなるレポートもそうあって欲しいと考えているので、率直に評価したい。と同時に、安易に提出を求める教員と安易に提出してくる学生の間にはびこる砂漠状況を克服するきっかけをも与えられた。今、私はそう受けとめている。
- 3) 一人一人のレポート内容の紹介はしないで、書かれた内容から三つの論点を取り出してみる。
  - ① 沖縄県民の本土（日本）観
  - ② 今大戦における沖縄戦の位置と意味
  - ③ 個々の苛酷な体験の集積から学ぶもの



## 演習 I レポートの概評 (2)

1996. 1. 8 土井

### 1. 12月18日提出のレポート全般についての概評

1) この課題レポートに至るまでに、① 戦後補償、② 大阪大空襲、③ 沖縄戦と平和の礎、④ 若者の旅、⑤ 794通の手紙、に関する6本のビデオを観た。その間に、家族の戦争体験レポートやビデオの感想文が、4回提出された。今回のレポートは、これらを集約した内容になっている。最後のビデオが、必ずしも全部のまとめにふさわしいものではなかったせいか、その内容についての戸惑いや批判もあった（これについては、後述する）。

2) 最終レポートは、三つのタイプに分類できる。第一は、これまでのゼミ経過を辿りながら、自分自身の戦争認識の変容過程に照準を合わせているもの（女子学生に多い）。第二は、すべてを論じることは困難なので、一つまたは幾つかの論点に絞って持論を展開しているもの（男子学生に多い）。第三は、それらが複合しているもの、である。全体として、扱った素材がすべて写真・映像または聞き書きによっているためか、衝撃の大きさが読み取れる。

しかし、厳密に言うると、だからといってこれら全部が「真実（本当の事実）」である保証などないのである。何故か。ある意図のもとで企画された映像・報道や聞き書きでは、プロットに合わなかったり都合の悪い事実はカットされているのが普通だし、その時代の限界が大きな制約条件になることも多い。悪例を挙げれば、ナチス全盛の頃は、写真などの実写資料の改ざんや捏造が頻繁に行なわれ、無実の人を抹殺するための証拠資料が作られた。写真ですら「虚偽（うそ）」になり得るのだから恐ろしい（この場合の意図は、邪悪の一言につきる）。大岡昇平の『レイテ戦記』、本多勝一の『南京への道』などは、資料の背後に潜む多様な意図を選びわけ、多くの「不明と虚偽」に立ち向かう気の遠くなるような努力と忍耐を重ねながら、動かしがたい事実

を一つ一つ積み上げ構成した作品であることを忘れないで欲しい。これは、とても大事なことからである。

## 2. 6 本目のビデオを観て学生が提出した論点を素材に考える

- 1) 12月18日のゼミの時間にせっかく話し合ったことでもあるから、『時は流れずー794通が語る太平洋戦争』（1995. 8. 13 NHKスペシャル 90分）を最初に取り上げる。先に「戸惑いや批判」と書いたが、「批判」の方はN君のレポート（先の第二類型）である。① 沖縄の姿、② 政治家の歴史認識、③ 戦争教育、の三つの論点について自説を展開していて密度が濃い。その③の文脈、とくにマスコミの報道姿勢を問う中で、この番組もまた「忠臣蔵」に代表される人情劇の延長上に位置づけられている。戦争を扱った番組が夏の一ヵ月間に集中する点も、彼には不満である。
- 2) では、この番組を支えた報道側の意図を考察してみよう。戦後50年、しかも敗戦当日かその近辺で放映することが、この企画の要件であったろう。地味だがかなり大がかりなこの記念番組の、視聴率を上げる絶好の時期でもある。しかし、より重要な意図は、限られた時間内で794通の何と何を読み上げるか、その基準を探ることではっきりする筈だ。私が気付いた第一は、少数の下級将校の他全員が下士兵卒、つまり一般庶民であったこと（戦死すると一階級上がり、武勲を上げれば二階級特進した）。第二は、戦後の日本社会、とりわけ現在の私たちの多様な価値観の中に、広く許容される事例が選別されていること。第三は、その対極としての忠君愛国、滅私奉公、親への孝養等、戦前の一元的な価値観に彩られた事例が選別されていること。第四は、第一と第二、または第一と第三の基準を満たし、かつありふれているが故にごく身近に受けとめられる事例、親子・夫婦・親族間の情愛に満ちているが故に受け手の心を揺さぶってやまぬ事例、あまりにも特異で非人間的であるが故に深く考えさせずにおかぬ事例、などを注意深く配置していること。

多くの庶民が召集され、それぞれの思いを抱いて死んでいった。時を止めた遺族も、視聴者もともに涙する。それでいいのか、というのがN君の批判点である。だが、登場した事例は泣かすものばかりではない。戦争とは何か、あの人々は何故死んでいかねばならなかったのか、を多数の視聴者に考えさせるのがこの企画の主たる意図だったのではないかと思うが、どうだろうか。この種の企画が、特定の時期に集中することへの疑問もわからないわけではないが、時の流れには“節目”というものがある。ないとすればあえて立ち止まる努力をしなければ、時はただひたすら流れるばかりである。問題の所在をどこかの時点で発見し自覚し、考えることでしか、私たちは過去と未来を現在を通じて結び合わせることができない。

- 3) 戦争の被害者としての体験が、加害者としての責任を曖昧にしがちな日本人と日本社会のひずみについては、N君、Ykさん他も論じている。しかし、この番組をそうした視点でとらえてみると、どうなるだろうか。この論脈に即して、以下、Tさん、Nさん、二人のレポート（先の「戸惑い」の部類）を取り上げる。

Tさんは大変真面目なので、これを何とか総まとめの資料に使い論理の整合をはかろうと苦慮した。彼女は、「なぜ、あの人が死なねばならなかったのか」という問いかけを起点にすえる。何故なら、「一個人の思いというものを全く無視して戦争を考えるということは、その本質的な部分を失ってしまうことになる」「戦争の中で傷つき、死んでいくのは結局一人一人の人間なのであるからだ」。だから彼女は、「現代日本社会の繁栄は、数えきれない戦争犠牲者のおかげである」という命題を、最初に論破しておかなければならなかった。多くの犠牲の上にあぐらをかいた平和と繁栄…。「我々は初めの戦後認識の時にすでに、大きな誤ちを犯してしまっているのではないのか。だからこそ後々の認識も歪んでいっているのではないだろうか」と、彼女は自問し、靖国神社公式参拝の隠された意図を引き出し、朝鮮人被爆者を差別し続ける平和運動の盲点を突く。展開部分では、国家（政府）、

個人(国民)の二つのレベルに分けて戦争責任が問われている。前者は紹介するまでもないが、後者にも①体制順応主義、②無知という二つの罪があるとする論法は、秀逸である。無論、彼女が素手でこうした難題を解析しているのではないことは、今回もまた、文末に参考文献が2点、記されていることから推察される。それで良いのである。素手で書かれたレポートは、往々にして情緒的・体験的な感想に終始するもので、自己認識を広げ、深めることを妨げる場合が多い。知ったかぶりの受け売りさえ拒否するならば、優れた文献・資料に依拠して論述する方が良いに決まっている。この点は、学生も私たち教員も同じである。ただ残念なことに、Tさんのレポートではこの番組の具体的内容との関わりが欠落していた。

- 4) 一方のNさんのレポートは、先の第一類の典型である(したがってその要旨は、関連するYnさん、Fさん他のものとともに後で触れる)。彼女の論述スタイルは具体的、実感的、歴(生育)史的である。対極にYnさんのそれを置くと、他の学生のそれはその間のどこかに配置されるという意味で、もう一つの極に位置づく。

彼女が、直接この番組の内容に触れるのは、ちょうど中頃(5頁中段)以降である。最も印象に残ったのは、自身が語ったように婚約者の「自決」の跡を辿った女性の事例である。「自分のもっとも愛して信頼していた人の罪を、責めることができるのか。(中略)なぜ彼女はテレビカメラの前で、婚約者の罪を語れたのか」という問いは、深められるだろうか。

ゼミの時間中、私は「この事例は〇〇ではなく、〇〇だったのではないか」と助言したが、実は自信がなく、ビデオを観なおしてみた。ところが、あの箇所にくると平静でいられないせいか、いろいろな思いが錯綜するためか、どうもはっきりしない。そこで年末、私の妻に初めから通しで観てもらった。そうしたら、妻も彼女と同じことを言うので、私は慌てた。偉そうなことを言いながら平気で事実を誤認していたとすれば、私の責任は重大だ。その問いは、彼女のレポートの

主題でもあるのだから。再びその箇所を確認して、ようやく結論を出した。山路梓さんは、口ごもりながらも確かに「戦友たちにそういう凄惨なめにあったということは、十中八九疑うことはできない」と語っていたからである。何を確認すべきかを知っていた妻ですら間違っただから、彼女に責任はない。むしろこの際、私たちの五感もそうあてにはならないものだということを確認しておきたい。

それでもなお、彼女の問いは深く重い（A君のレポートの「こだわり」とともに後述する）。感受性豊かな彼女は、この番組に深い共感を覚えたようだが、「日本の加害責任を考える心に少し、波をたてられてしまった。（中略）私だって、責任云々を考えるよりも、腹立たしさや憎しみのない静かな悲しみに、ただ共感していられたらと思う」（9頁）と、戸惑いに発した苛立ちの感情を吐露する。筆がすべったのかもしれないが、「考える心」とは、言い得て妙である。この苛立ちに耐えかねて反発に転じたのがN君であったが、彼女はこの苛立ちを押さえこんでしまおうとする。しかし、考える器官は脳なのであって、心は、感じるのが役どころである。彼女が袋小路に入りこんだのは、両者のバランスが崩れたからなのか。

- 5) この番組は、ごく普通の遺族や知己が長い間大切にし、沈黙してきた史実を一般に公開したものである。したがって、当事者が触れて欲しくない、公開して欲しくない部分は放映されなかつただろうし、企画を知っても黙っていた人は応募しなかつたはずである。中には、取材にあたって当事者を説得し、言いたくない部分まで語らせた例があったかもしれない。報道の背後で、様々な人間模様がうごめき、絡み合っていることであろう。それでもなお、私はこの番組の複合的な意図にこだわってみたい。

主題に関わる幾つかの論点のうち、N君、Nさんが見落とし、Tさんが抽象論で切り上げてしまった論点がある。それは、「民衆の側の戦争責任」という論点である。登場人物の発言のなかに、これを集約するものがあつた。B・C級戦犯で刑死した人々は自分の身代わりだと

して写経の日々を送る守田幸夫さんは、「悪いのはあの方々ではなくて、戦争ですよ」と、話をしめくくった。「そうだ、そのとおりだ」と同感したい気分になるが、ここに、論理の飛躍はないだろうか。この発言には善意の、普通の人の側の「責任のすり替え」がないか？

実際に、B・C級戦犯を裁く過程にはたえずいい加減さと政治的駆け引きがつきまとい、運が悪かったとしか思えない刑死者もいた。上級士官が刑を免れたいために指揮命令系統を曖昧にしたり虚偽の証言をしたため、末端の実行者につけがまわる事態が続出した。最前線の捕虜収容所では、日本軍の悪業の数々を憎む民衆の不確実な証言によって、法廷で無実の罪をなすりつけられた人もいたようだ。だからこそ、この論点の取り扱いには慎重な手続きが要るのである。

日本軍国主義の総括が進むなかで明らかになった特徴の一つに、「無責任体制」というものがある。命令系統の下位の者から順に免罪していくと東条英機陸軍大将に到達するが、当の東条はヒトラーやゲーリングよりもずっと往生際が悪かった。彼は、「天皇陛下の意をおもんばかって」開戦を決めたと言う。極東軍事裁判において、政治的理由から何としても天皇の責任を免罪したかったFBI出身のキーナン首席検事は、打ち合せ通りに答えない東条に激怒した。これは、もうほとんど漫画の世界である。結論を急げば、東条以下の為政者たちは、真に「自己」の戦争責任を自覚していなかった。それは軍人ほどひどく、陸海軍指導者のなかには巢鴨刑務所の内外で、刑死を免れたくて責任転嫁の泥仕合を演じた者たちもいる。

こうした醜い人間ドラマも、残念ながらその有力な証拠の一つである。「無念にも」絞首刑になったA級戦犯者の辞世の句を、幾つか紹介しておこう。

寒月や幾世照らして今ここに（東条英機）

散る紅葉吹かるるままの行方かな（陸軍中将・武藤章）

うたかたの如くこの世に生まれ来て

露と消えいく我身尊し（陸軍大将・土肥原賢二）

これらの句に接して、ある人はそこに東洋的な諦観を、またある人は武人としての潔さを感じとる。しかし、私はここに、自己の無責任性に最期の最期まで気づくことなく逝った人々の虚飾をみる。これらは、日本軍国主義の愚劣さを象徴する証言であると思う。

「こども二人のためにね一生懸命働いてですね、やっぱ学校もさしてから、お父さんの遺言がですね、一生懸命に…あれしてくれちゅってね、太らかしてから、頼むのお手紙がきましたかね……。一生懸命頑張ってきました」。これは、刑死した夫を想い福岡弁で胸中を語った藤中光子さんの言葉である。海軍一等兵曹だった夫の見識ある遺書が、彼女の戦後を支えた。遺書は、幼い二人の愛児に平和建設のあり方を切々と優しく伝えている。

巣鴨で刑死したB・C級戦犯の手記には、死を見つめる時間の長さ、戦後の数々の情報故か、諦念のかなたで透徹した知性と深い時局認識に達したものが多いいわれる（それは、今の沖縄の大田県政にも通じている）。傷のなめ合い、他罰志向と責任転嫁の悪循環…。投票行動すらせずに政治を批評する、現代日本の無責任体制。厳しく「民衆の側の戦争責任」を総括したことのない日本人と日本社会が、「福祉社会」の実現を叫んでみても道なお遠しの感がある。

## 演習 I レポートの概評 (3)

1996. 1. 22 土井

### 3. 学生の戦争認識とその変容

- 1) ことに女子学生に多かったこの論点を深めるために、最初にYnレポートを取り上げる。彼女の文章は、はにかみやのせいか感情抑制的、総じて客観的である。それでも今回のレポートは、ずいぶんふっくらとしてきた。書出しは、ゼミ学習の正確な記録になっている。「太平洋戦争についてゼミで学習を始めるようになったのは、確か戦後補償のビデオを見た時からであったと思う。私が『父や祖父母が戦争中どのような生活をしていたのかを知りたい』とレポートに書いたところ、夏休みに家族の戦争体験についてのレポートを書くことになり、それが二ヵ月に及ぶ学習へとつながった」のは、本当である。「なにげなく書いた一言がこのようになって、夏休みのレポートを書く頃には正直言って面倒だと思っていたが、元来興味のあるテーマであったし、学べば学ぶほど自分の知識が増えていくことが、とても楽しく感じられた。同時に、今まで本当に戦争に対して何も考えずに生きてきたことを恥ずかしく思った」。

彼女は、自分が受けてきた小中学校、高校の歴史教育をふりかえり、戦争について学ぶ機会がなかったことを残念に思っている（ゼミメンバーの中で、その十分な機会に恵まれてきたのは、Tさんくらいのものらしい）。彼女は、中学一年生の家庭教師をしているが、アジアの地理を教えていて「昔は日本が中国や朝鮮半島を侵略して行って、植民地にしたんだよ」と言うと、とても驚いていたようだ。つぎはぎで浅い知識、偏った知識しかないと、被害者意識が植えつけられるか、無関心で過ぎてしまう。彼女はそう考えながら、これまで観てきたビデオを一つ一つ思い起こし、それらへの見解を的確にまとめている。その中の「戦争を伝えようとする人に私たちが出会っていない」という言葉が、印象的であった。彼女もまた、伝えようとする大叔母さん



と、最近「会った」ばかりだったからである。

この点で、他の学生の場合はどうだろうか。Ykさんの小学校時代には、毎年8月6日に平和授業が行なわれ、家族旅行で原爆記念館を見学した。中学、高校では「表面上だけの形になってしまいましたが、時代にそって戦争の授業も受けました。だから、それなりに戦争に対するある程度のイメージというものは持ってい」たつもりであったが、あらためて自己の無知を知り、大きな衝撃を受けたと言う。しかし、戦後補償にしても「自分のことばかり考える人がふえている」現在、彼女はそうした責任の観念が広く国民の間に定着していけるかどうかを危惧する。

Fさんは、戦争を知らない世代の一人として「戦争について客観的事実しか知らなかった。その客観的事実といっても、それは私の場合、中・高の歴史の授業で習ったという程度のものでしかなかった。個人的に戦争によほど関心を持っているかでない限り、おそらく私たちが真の事実を知ることは不可能であろう」と述べ、ゼミの時間にドラマ性のないドキュメンタリーに幾つも接しられたことで、自分の戦争観が大きく変わったと言う。彼女は、昨夏、「きけわだつみの声」という映画を観に行った。「それは戦争のむなしさや戦争による死の哀しみなどを非常に強く訴えるものであった。戦争の異常性によって為された行為のシーンなどもいくらかはあったが、根本的に戦争の被害者の立場から描かれたドラマであった」。この箇所に接した私は、1月29日の補講（集中）ゼミの最終時間帯に、「長い航跡－50年目のわだつみのこえ」（1993.8.13 NHK 50分）という番組の録画を観せることに決めた。わだつみ世代と大学生たちの、厳しい対決場面もある番組である。

- 2) 朝鮮人強制連行の帰結の一つは、「浮島丸事件」の悲劇であった。とくにこの事件にこだわったMさんは、アジア諸国に対して「計り知れないほど残虐であった」加害者日本の姿に、新たな課題を見出す。日本だけを悪者にするような風潮は許せない、と本気で考えている政

治家も多いなかで、アジアとヨーロッパ、アジアと日本、アジアにおけるヨーロッパと日本、それぞれの歴史的な関係を正確に認識し直すことは、今年度のゼミの最終的な課題であろう。時間が許すなら、「映像の世紀6 アジアの指導者たち」(1995. NHK 90分)をぜひ観てもらいたいと考えている。

戦争の加害者責任の問題を起点に、N君に「お涙ちょうだい」と批判を浴びた「794通の手紙」まで、実に沢山の映像資料を扱ってきた。学生の最終レポート(本当の最終課題レポートは、1月29日に出題予定であるが)を読んで、映画やドラマを一切取り上げなくて良かったと思っている。こうした形の教材としては、やはりノンフィクションの方が手堅いのである。

この間の学習は、学生にとって決して楽しいものでも軽いものでもなかった。彼らは、私が指示しない多数の文献・資料にあたった。戦争を体験した家族と向き合った。私の数々の不手際をものともせず、ひたすら走り抜いてくれた。この1年で最も学ぶことの多かった人間は、実は私であったように思う。じっくりと考えを深められないでいたテーマに、こんなに大量のエネルギーを注ぐことができたのだから。

#### 〈追記〉

この原稿提出締切が1996年1月16日であったため、1月22日配布予定の「レポートの概評(3)」までを掲載したが、ゼミは1月29日の補講(集中)をもって終了した。したがって、同日、私が提出した「レポートの概評(4)」を欠いており、全体に不整合がある点はお詫し頂きたい。

補講前半でテキスト1冊をなんとか読破させ、後半で予定の録画を観せた。一年間のまとめ「タイトル・枚数自由」(2月14日締切)のレポートを読了した現時点で、今年度の基礎ゼミでは「獲得目標」を七割程度達成できたと判断している。

うち5割は、感性に支えられた論理的思考能力の形成に関する部分。こ

れは、各自がのびやかにたくましく、書きまくった賜である。しかし、それが必ずしも共同学習の力量には結びつかなかった。この点は教師の側の責任であるが、ゼミ生同士の横のつながりは、実はゼミの時間外に張りめぐらされていた事実を知った。これが、残り2割の根拠である。それと、これまで地味で目立たなかった学生たちが、逆転満塁ホームランともいえる優れたレポートを提出してきたことを、最後に申し添えておく。9名の学生たちは、次年度、八つの専門ゼミに分散する。徒党を組んで移動しなかった彼らの個性と見識に、私は拍手を贈りたい。 (1996.2.18 記)